慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アイルランド人季節移民と19世紀のイギリス農業
Sub Title	Irish seasonal migrant and British agriculture in the nineteenth century
Author	斎藤, 英里
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.特別号-II (1990. 3) ,p.73- 90
JaLC DOI	10.14991/001.19900302-0073
Abstract	
Notes	中村勝己教授退任記念論文集：西洋経済史・ 思想史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900302-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」82巻特別号—II（1990年3月）

アイルランド人季節移民と19世紀のイギリス農業

斎　藤　英　里

目　次

I　問題の所在
II　イギリス農村におけるアイルランド人季節移民
III　アイルランドにおける季節移民の発生基盤
IV　むすび

I　問題の所在

イギリスにおける資本主義の発展過程と，その周辺部に位置するアイルランドの歴史とは，どのような構造的関連にあったのだろうか。この問題については，19世紀を対象の中心として近年我が国で徐々に研究の蓄積が進んでいる。松尾，本多，杉原，石井諸氏の一連の研究は，いずれもイギリス資本主義の影響によって産業構造が偏倚化し，社会的分業の展開度の狭い対英従属的な農業圏へと編成替えされるに到ったアイルランドの様々な特徴を明らかにしている。(1)

アイルランドはまた，膨大な移民を発生させたことから知られるように，産業構造のみならず，人口構造や労働力移動の面においてもイギリスと深い関係にあった。ところでこの移民には，イギリスやアメリカへ（半）永住する形態と，夏場にイギリスへ一時的に渡る季節移民＝出稼ぎとの二つの形態が存在した。前者が主として大都市の工業地帯へ流入したのに対し，後者は本論で詳述するように主として農業労働者層を形成したのである。(2) アイルランド人移民について我が国では，イギリス産業革命を支えた安価な労働力という視角から迫った本多，富岡両氏の研究があるが，(3) その対象は主として永住移民を扱っており，もう一方の季節移民の実状については，明らかにするべき点がまだ多く残されているように思われる。(4)

注（1）　主な業績として以下のものがあげられる。松尾太郎『近代イギリス国際経済政策史研究』（法政大学出版局，1973年），特に第3章，同『アイルランドと日本』（論創社，1987年），特に第I部第2章，本多三郎「アイルランド農業とイギリス資本主義」（『経済論叢』（京都大学）第117巻第4号），同「大飢饉後のアイルランド農業」（『大阪経大論集』第159-161号）。杉原薫「イギリス産業革命とアイルランド」（角山栄編『講座西洋経済史II　産業革命の時代』，同文館，1979年所収）。石井光次郎「19世紀前半のアイルランドの市場分析とその特徴」（『東京経済大学論集』第5号），同「19世紀第2四半期のアイルランド農業と農業労働者」（『社会経済史学』第51巻第4号）。

本稿は，上記の点に鑑みて，19世紀のイギリス農村において大量に臨時雇用されたアイルランド人季節移民の実状を解明するとともに，そのような移民を発生させたアイルランドの社会経済的背景をも併わせて考察することを主眼としている。筆者はこうした検討を通して，イギリス資本主義とアイルランドとの構造的関連の追求という作業に新たな視点を加えるとともに，労働市場から見た19世紀のイギリス農業の特徴の一端をも浮き彫りにできるのではないかと念じている。

II　イギリス農村におけるアイルランド人季節移民

(1)　イギリス農業と季節労働者

19世紀のイギリスでは，いわゆる「黄金時代」と呼ばれる世紀中葉を中心として，資本主義的農業が十全に展開を見せていた。前世紀よりエンクロージャーと農業革命を経て資本家的大借地農経営が確立されたこと，耕地の拡大が穀物法廃止以降も続き，牧畜と穀作の集約的結合によるハイ・ファーミングが完成されていったことなどは，周知の史実であろう。[5] またこうした一連の農業発展の結果，農業労働者の特徴も大きく変化していった。この点も先学の諸研究により既に明らかにされている[6]が，さしあたり本論にとって必要な諸事項をここで再確認しておきたい。

農業労働者には，主として常雇と日雇との二つの形態があった。資本主義的農業の発達は，こうした職能分化を一層促すとともに，日雇労働力の比重の増大をもたらした。[7] しかも産業革命期，とりわけ対仏戦中から戦後にかけては，借地農が経営合理化を追求する中で，日雇の中でも特定借地農と雇用関係下にある常時雇用型日雇よりも，そうした関係下にはない臨時雇用型日雇の比重が高まるという不安定な労働市場が形成されていった。こうした臨時労働力への依存は，大農経営になるほど顕著に見られる傾向だったのである。[8]

常雇労働者が農事監督，犂男，荷馬車夫，牛・豚飼等々の比較的熟練を要し，雇用が長期に亘る

注（2）　アイルランド人移民を扱った論稿には，この二つの形態の差異に留意していないものが多い点が研究史上批判されよう。斎藤英里「19世紀のアイルランドにおける貧困と移民」(『三田学会雑誌』第78巻3号，89-90頁)を参照されたい。なお，ハンドレー（J. E. Handley）の古典的研究は，'Seasonal Migration' と 'Permanent Immigration' とを別の章で論じており，既にこの点を明確に区分している。彼はまた，migratory laborer＝navvy を両者の中間形態としてとらえている。J. E. Handley, *The Irish in Scotland*, 1798-1845 (Cork, 1943), Chap. II, III, IV.

（3）　本多三郎「19世紀中葉イギリスにおけるアイルランド人貧民」(堀越智編著『アイルランドナショナリズムの歴史的研究』，論創社，1981年所収)，同「19世紀中葉イギリスにおけるアイルランド人貧民問題」(『大阪経大論集』第141号，第145・146号)。富岡次郎『現代イギリスの移民労働者』(明石書店，1988年)，第三章。

（4）　季節移民については，富岡，前掲書，83-87頁に概説的記述がある。

（5）　染谷孝太郎「ハイ・ファーミングの過程」(『明大商学論叢』，第66巻第3・4号)。

（6）　友松憲彦「産業革命期における賃労働の生成」(永田正臣編著『産業革命と労働者』，ミネルヴァ書房，1985年所収)，180-181頁が要を得た紹介をしている。

（7）　楠井敏郎『イギリス農業革命史論』(弘文堂，1969年)，90頁。

（8）　森建資「イギリス産業革命期における農業労働力の存在形態」(『土地制度史学』第62号，8頁)。

職種に従事したのに対し，日雇労働者は収穫労働，干し草作り，中耕，打穀等々の作業を担当した。後者の職種は，農繁期を中心に大量の労働力を必要としたことが特徴として指摘される。[9] この点に関してさらに重要なことは，先に述べた臨時雇用型日雇の増大という現象が，開放教区と閉鎖教区という教区の二形態への分化と結びついていたという事実である。とりわけ，1846年定住法以降，開放教区へ過剰労働者の定住地を限定することによって，借地農は労働力需要に応じて農繁期にのみ大量に労働者を臨時雇用することが可能となった。[10]「労働需要構造の変化に対する農業資本の対応」[11]がここに明確に見られるのである。

ところで多くの研究者が指摘しているように，産業革命期から19世紀中葉のハイ・ファーミング期を通して，資本主義的農業の発達は，労働力需要に関する季節的偏倚性を解消し，平準化することはなく，むしろ逆に労働集約性を高めることによって，この偏倚性をさらに拡大させていった。[12] その原因として，コリンズ（E. J. T. Collins）はマンゴールド，ターニップ，ジャガイモなどの根菜類の導入とその作付地の増大（1750～1850年に少なくとも5倍増大），ホップや野菜作付地，穀作地の拡大が例外的な労働需要を呼び，夏季の農作業プログラムに大きな危険や不安定的要素をもたらしたことを強調している。[13]

しかしこれと裏腹に，省労働力的農業機械の導入は緩慢にしか進行しなかった。1871年の段階でさえ収穫作業部門の機械化率は，イギリスの全穀作地面積の30%以下に留まっていた。ただし，71年以降数年間のうちに機械化率は2倍に急増するが，80年代になっても南部及び中部の大農場では，専ら農具が用いられていた。安価な過剰労働力の存在が，借地農に機械導入の誘因を十分に起こさせなかったためと言えよう。[14] もっとも，農閑期の主要作業である脱穀では対仏戦争中から戦後の時期にかけて機械化が進んでいた。しかし，これが冬季に失業を増大させたため，農繁期と農閑期の労働力需要の差がかえって一層拡大するという事態を招来したことも周知であろう。[15]

新農法（New Husbandry）が5月及び8月の労働需要を高め，その季節的偏倚性を拡大させたことに加えて，資本主義的農業の発達は地域的不均等性をも生み出していった。なぜなら，新農法の導入は1830年代まで軽土地帯に限定されていたからである。[16] 1750年以降におけるこうした農業の不

注（9） 楠井，前掲書，90頁。ただし，森氏は日雇の仕事の中に専門的熟練を要し，労働期間の比較的短い作業があることを指摘し，これらの作業を担当する者を「職人型日雇層」と類型化することも可能であると述べている。森，前掲論文，8頁，注(4)。

(10) 福士正博「ハイ・ファーミングにおけるイギリス資本制農業と農業労働隊制度」(『土地制度史学』第80号，25-26頁)。Raphael Samuel, "Village labour", in R. Samuel ed., *Village Life and Labour* (London, 1975), 14-15.

(11) 友松，前掲論文，181頁。

(12) 森，前掲論文，5-6頁，福士，前掲論文，24頁。C. Peter Timmer, "The Turnip, the New Husbandry, and the English Agricultural Revolution," *Quarterly Journal of Economics*, LXXXIII, 3 (1969). 392; E. J. T. Collins, "Migrant Labor in British Agriculture in the Nineteenth Century," *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser., XXIX, 1 (1976), 38-39; do, "The Rationality of 'Surplus' Agricultural Labour,": Mechanization in English Agriculture in the Nineteenth Century, *Ag. Hist. Rev.*, XXXV, pt. 1 (1987), 42.

(13) Collins, "Migrant Labour.....," 39.

均等発展性，経済発展や人口成長の地域差の増大，耕地の拡大，労働集約的作物への傾斜等々は，労働力の過不足状態を地域的にも季節的にもますます分化させていくこととなったのである。[17]

(2) アイルランド人季節移民の諸特徴

収獲期の農場では，通常の農業労働者だけでなく，その婦人や子供，農村の織布工，開放村落や都市からの流入者等々，様々な者に農作業を依存していた。[18] ところでコリンズは，こうした種類の臨時労働者とは別のものとして，農村間を規則的に移動する季節移民の存在を重視し，これを以下の3つのタイプに類型化している。すなわち，(1)牧草・森林地帯から穀作地帯への移動，(2)丘陵と渓谷，軽土地帯と重土地帯，北部と南部，異なる農業制度等々の間に存在する農作業の時期と順序のずれを利用した移動，(3)自給的小農場から資本主義的大農場への移動がそれである。[19]

コリンズによれば，このうち第三のタイプは他の二つに比して移動距離が長く，長期間に亘り，かつ量的にも最も重要であった。かかる移民を発生させた中心は，いわゆるケルト周辺（Celtic fringe）と呼ばれている地帯であった。すなわち，スコットランド高地地帯，ウェールズ丘陵地帯，就中，本稿で考察するアイルランド西部がその発生源をなしていたのである。[20] そこで以下では，季節移民の中心を構成したアイルランド人に対象を絞り，その様々な特徴を検討したい。

①流入時期と流入者数

「19世紀初頭のイギリスにおける多様な移動の流れの中で，アイルランドからの流入はとりわけ最も顕著であった」とレッドフォード（A. Redford）は指摘している。[21] イギリスにおけるアイルラン

注 (14) do, "Labour supply and demand in European agriculture 1800-1880," in E. L. Jones and S. J. Wolf eds., *Agrarian Change and Economic Development: the Historical Problems* (London, 1969), 74-75, Table III; do, "The Rationality of 'Surplus' Agricultural Labour.....," 44. ただし，農具の改良は1790年以降進展していた。しかし農作業の大部分が，重い農具を使いこなす体力のない女性や，mowing（根刈）や bagging の基礎技術に欠けた工業労働者の臨時雇用，sickle（小鎌）を使用するアイルランド人季節移民らによって営まれた所では，scythe（大鎌）や bagging-hook（草刈鎌）などの改良農具の導入は極めて困難であった。do, "Harvest Technology and Labour Supply in Britain, 1790-1870," *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser., XXII, 3 (1969), 463.

(15) 森，前掲論文，6頁。なお近年，脱穀機の導入の時期と地域差をめぐって論争が起きている。S. Mac Donald, "The Progress of the Early Threshing Machine," *Ag. Hist. Rev.*, XXIII, pt. 1 (1975); N. E. Fox, "The Spread of the Threshing Machine in Central Southern England," *Ag. Hist. Rev.* XXVI, pt. 1 (1978), 及び同誌上における MacDonald の反論を参照されたい。

(16) 田淵淳一「農業革命研究の動向と課題（続）」（『経済学研究』（北海道大学）第32巻第4号，291-292頁）。

(17) Collins, "Migrant Labour.....," 38.

(18) David H. Morgan, "The place of harvesters in nineteenth-century village Life," in R. Samuel ed., *op. cit.*, 29; E. J. T. Collins, "Labour supply and demand.....," 65.

(19) Collins, "Migrant Labour.....," 43-45.

(20) *Ibid.*, 45.

(21) A. Redford, *Lobour Migration in England 1800-1850* (Manchester Univ. Press, 1926, 2nd ed, 1964), p. 132.

ド人貧民の存在は，既に中世において社会問題化するほど[22]で，季節移民も1750年以前にロンドンの近隣諸州（Home counties）や，イングランド西部において雇用されたことが知られている。彼らの流入は1790年以降急増するが，それが本格化するのは19世紀の20年代に入ってからである[23]。そして後に述べるように，世紀中葉頃にその数は最大に達し，それ以降は減少傾向をたどったのである。

永住移民であれ季節移民であれ，アイルランド人の流入状況は，アイルランド国内のプッシュ要因とイギリスのプル要因との相互関係によって規定され，その数は変動していった[24]。

例えば，1793年から1815年の対仏戦争期をとりあげて見よう。この時期イギリス農業は一般に繁栄の様相を呈し，労働力不足を来していた。しかし，アイルランド及びスコットランドからの季節移民の流入数は増大したとは言うものの，むしろ当地における農業の急速な繁栄に吸引されて，その流出は阻止されがちだった[25]。

ところが戦後になるとイギリス農業は著しい不況に見舞われ，労働市場は一転して過剰状態となった。だが，このような労働力過剰期においても，穀作地帯では収穫や干し草作りに労働者は依然不足していた。こうした状況下で，労働者供給源基地としての役割を果たしたのが，ケルト周辺地域，とりわけアイルランドだったのである[26]。この場合，移民の発生は上述のプル要因に加えて，戦後不況が中心部のイギリスよりも周辺部のアイルランドにおいて一層深刻な形態で現れたというプッシュ要因との相乗的結果だったことに留意しなければならない。加えて，1816年にイギリス—アイルランド間を走る蒸気船が就行したことも，移民の流出に迫車をかけた。1820年以降船舶会社の過当競争で運賃は低下[27]し，これと1822年のアイルランドの飢饉が重なって季節移民はさらに増加した[28]。当時，数百トンにすぎない船舶が，片道1,000人から1,500人もの乗客を運んだと言われている[29]。

さて，1840年代以降，イギリスの農業労働市場は再び不足局面を迎えるに到った。その理由としては，鉄道建設に大量の労働力が吸引されたこと，鉄道網の完成で農村から都市への人口移動が促進されたこと，さらに農工間の賃金格差のため工業へ労働力が移動したことなどが指摘される。一方，アイルランドでは対仏戦争後の深刻な不況が慢性化していた。1841年にとられたセンサスによると，アイルランドから発生した季節移民は，60,000人に迫るほどになっていたのである。農村の

注（22） do, *loc. cit.*

（23） Collins, *op. cit.*, 49.

（24） 本節，③の冒頭の指摘も見よ。

（25） Redford, *op. cit.*, p. 142. 以下で述べる19世紀のイギリス農業労働市場の特徴については，E. L. Jones, "The Agricultural Labour Market in England, 1793-1872," *Econ. Hist Rev.*, 2nd ser., XVII, 2 (1964) を参照した。

（26） Ibid., 326.

（27） 極めて低い船賃の例として，アーヴィン（H. S. Irvine）は次の二つをあげている。①Belfast-Glasgow，6ペンス，②Belfast-Liverpool，3ペンス食事付。ただし，いずれも三等船室。H. S. Irvine, "Some Aspects of Passenger Traffic between Britain and Ireland, 1820-50," *The Journal of Transport History*, IV, 4 (1960), 229.

（28） Redford, *op. cit.*, pp. 142-143; Collins, "Migrant Labour.....," 49.

（29） C. Ó Gráda, "Seasonal Migration and Post-Famine Adjustment in the West of Ireland," *Studia Hibernica*, XIII (1973), 51.

第1表　アイルランド人季節移民数の推定値

年＼出典	1841年センサス	コリンズ	オグラダ	ハンドレー（スコットランド）
1820年代				6,000～8,000(1)
1830年代			35,000～40,000(2)	
1841	57,651(3)			25,000(1840年代)(4)
1846—48		70,000以上(5)		
1860年代中葉			60,000(6)	

（出典）

(1) J. E. Handley, *The Irish in Scotland, 1798—1845* (Cork, 1943), p. 35.（この数値の推定根拠は明示されていない。）

(2) C. Ó. Gráda, "Seasonal Migration and Post-Famine Adjustment in the West of Ireland", *Studia Hibernica,* XIII (1973), 51.（1830年代に行われた「貧困調査」(poor inquiry) をもとにした，控え目の推定値。）

(3) *Report of the Commissioners Appointed to take the Census of Ireland for the Year 1841,*（以下，*Census of Ireland, 1841* と略）B. P. P. 1843, XXVI, p. xxvi.（定期船の乗客数。ただしこの数値には，不定期貨物船で渡った者や，小さな港から出航した者が含まれていない。）

(4) Handley, *op. cit.,* pp. 35—36.（定期船の乗客数）

(5) E. J. T. Collins, "Migrant Labour in British Agriculture in the Nineteenth Century", *Econ. Hist. Rev.,* 2nd ser, XXIX, 1 (1976), 50.

(6) Ó Gráda, *op. cit.,* 54.（Midland Great Western Railway の資料による控え目の推定値。）オグラダは，100,000人でさえ過大ではないと主張している。

第2表　19世紀末におけるアイルランド人季節移民の数とその行き先

年＼行先	アイルランド国内	スコットランド	イングランド	総　数(1)
1880	2,148 (9.4)	3,771 (16.5)	16,981 (74.1)	22,900 (100.0)
1882	1,159 (6.9)	2,455 (14.6)	13,222 (78.5)	16,836 (100.0)
1884	1,028 (7.1)	2,262 (15.7)	11,123 (77.2)	14,413 (100.0)
1886	660 (5.3)	1,732 (14.0)	9,983 (80.7)	12,375 (100.0)
1888	557 (4.7)	1,216 (10.4)	9,950 (84.9)	11,723 (100.0)
1890	484 (3.4)	1,718 (12.2)	11,879 (84.4)	14,081 (100.0)

（資料）*Agricultural Statistics, Ireland, 1880,* B. P. P. 1881, XCIII, その他，各年度の農業統計より作成。

(1) ハンドレーによれば，統計に示されたこれらの総数は，実際の季節移民数の60%程度にすぎないと言う。J. E. Handey, *The Irish in Modern Scotland* (Cork, 1947), p. 171. また，オグラダもこの説に同意している。Ó Gráda, *op. cit.,* 57.

窮状は，1845年から48年にかけて発生した「大飢饉」(The Great Famine) で頂点に達し，膨大な数の人口が流出するが(30)，季節移民も当面の時期を通して増大していった。第1表は，19世紀初頭から60年代に到る時期の季節移民数の様々な推定値を掲げたものである。ここに示された数値は，正確さに欠ける統計を寄せ集めたにすぎないが，この時期の季節移民数の動向を知る一つの手がかりとなろう。

季節移民についての統計が年々整備されたのは，19世紀の80年代になってからのことである。第2表は季節移民数の推移を行先別（アイルランド国内，スコットランド，イングランド）に示したもので

注 (30) 1851年から61年におけるアイルランドからの総移住者数は，120万人を越えていた。富岡，前掲書，60頁，第3表。

あるが，この表から他の二地域に比したイングランドの吸引力の大きさがわかるであろう。しかし，季節移民の数は世紀中葉に比して激減していたことも見落してはならない[31]。イギリスにおける農業不況がもたらした，労働市場の縮小を如実に示していると言えよう[32]。しかしその数は激減したとは言え，アイルランド人は構造転換するイギリス農業に曲りなりにも対応する型で労働力を供給し続けたことも事実である。また，季節移民がアイルランド社会自体において持つ意義は，依然として大きいものがあった。これらの点は，後段において明らかにされるであろう。

②流入地域

アイルランド人季節移民は，後に述べるように，雇用口を求めてイギリス各地の農場を移動して回った。こうした短期間の移動性ゆえ，彼らが臨時雇用された地域を確定することは容易ではなく，諸文献に見られる記述もまちまちであるが，おおよそ以下がその中心地域と考えられよう。

(ア)スコットランド低地地帯

第1表から確認されるように，19世紀中葉においてアイルランド人季節移民の多くは，スコットランドへ向かった。スコットランド低地地帯では18世紀中葉以降の農業発展に伴って，高地人（Highlander）収穫労働者を雇用していたが，同世紀末から19世紀初頭にかけて，アイルランド人が彼らを駆逐し始めた。

アイルランド—イギリス間を走る蒸気船の就航については既に述べたが，その最初の便がベルファースト（Belfast）—グラスゴー（Glasgow）間を往復したことも，この時期アイルランド人を多くスコットランドへ向けて送り込む一因となった。1820年代には年6,000人から8,000人のアイルランド人が当地へ渡っていたが，40年代になると僅か一週間で同人数の渡航者があり，夏季を通して25,000人の収穫労働者が海を渡ったと言われている（第1表）。彼らは平均300エーカーと大規模穀作農場が多く，収穫が早期に行なわれるロクスバラ（Roxburgh）やバーウィック（Berwick），およびロージアン（Lothian）諸州で農作業に従事した後，北西へ向いスターリングシャー（Stirlingshire）やファイフシャー（Fifeshire）へ進み，さらに北のパースシャー（Perthshire）にまで足を伸ばし，最後にグラスゴー周辺の耕地地帯へと流れてくるのを理想的な行程としていた[33]。

(イ)イングランド東南部

アイルランド人季節移民の流入地域は，時代が移るとともにスコットランドの比重が低下し，イングランドの比重が増大していった。ところで，イングランドの中でもアイルランド人は特定の地域に向い，雇用される傾向があった。こうした例としてまずあげられるのは，東南部の穀作地帯である。これらの地域では，穀物増産期に労働力の絶対的不足を来していたため，アイルランド人にとっては絶好の雇用機会を提供したのである。彼らはまずミドルセックス（Middlesex）で干し草刈

注（31） 農業統計を批判したハンドレーに従って数値を上方修正しても，依然移民数の激減という事実は変わらない。J. E. Handley, *The Irish in Modern Scotland* (Cork, 1947), p. 171.

（32） 本多三郎「19世紀後半アイルランド土地問題」（『大阪経大論集』第187・188号，53-56頁）。

（33） J. E. Handley, *The Irish in Scotland, 1798-1845*, pp. 20-53.

りに従事した後，南下してサリー（Surrey）やサセックス（Sussex），ケント（Kent）へ向かうか，あるいは北上してハートフォードシャー（Hertfordshire）やエセックス（Essex）へと移動した。こうした「主要ルート」に比べると，南や西へ移動する者は少なかった。[34] 先に指摘したロンドン近郊の諸州ではホップ畑や菜園が広がっており，大量の臨時労働力を必要とした点が特徴であった。[35] 加えて，6～7月に行なわれる干し草刈りと9月のホップ摘みとの間に農作業の時期的ずれが存在したことも，上記の地帯をアイルランド人が数ケ月に亘って移動しつつ，労働力を供給することを可能にしたのである。[36]

(ウ)イングランド中部～北部

1860年代後半以降，アイルランド人季節移民の減少は決定的となるが，そうした変化の中で雇用の中心地域もイングランドの中部や北部へ移っていった。モーガン（D. H. Morgan）はこの時期，彼らが重要な役割を果たした地域として，シュロプシャー（Shropshire）やウスターシャー（Worcestershire）ウォリックシャー（Warickshire），グロスターシャー（Gloucestershire）等の中部諸州とともに，ノーサンバーランド（Northumberland）やヨークシャー（Yorkshire），チェシャー（Cheshire）等の北部諸州の名を挙げている。[37] こうした地帯においても，第3表に示したように農作業に応じて幾つかの巡回路が存在した。アイルランド人季節移民の活動が広範囲に及ぶものであったことがわかるであろう。アイルランド人の北部への集中は，19世紀も末になるとより顕著になってきた。逆に80年代までに，彼らの姿はほとんどウォリックシャーやケンブリッジシャー（Cambridgeshire）北部以南から消えていたと言う。[38]

第3表　アイルランド人季節移民の巡回路と作業内容の例

巡　回　路	作　業　内　容
Cheshire—Lancashire	干し草刈り，じゃがいも掘り
Derbyshire—Shropshire—Nottinghamshire 北部	干し草刈りと穀物の収穫
Fens—Lincolnshire—Yorkshire—Staffordshire—Warickshire	穀物の収穫

（出典）E. J. T. Collins, "Migrant Labour in British Agriculture in the Nineteenth Century", *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser., XXIX, 1 (1976), 52 より作成。コリンズによれば，鉄道網の発達がこのような移動を可能にしたと言う。

③流入の地域差をもたらした諸要因

総じて，アイルランド人季節移民がイギリスにおける農業労働市場の中で占めた位置と役割につ

注 (34) David Hoseason Morgan, *Harvesters and Harvesting, 1840-1900* (London, 1982), pp. 76-77.

(35) 例えば1830年代のケントでは，臨時労働者と常雇との比率は3：1にまで達していた。Collins, "Harvest Technology and Labour Supply.....," 465. レッドフォードも，同州のあるホップ栽培人の下で600人ものアイルランド人が雇用されていた例をあげている。Redford, *op. cit.*, p. 146. もっともこの場合には，ロンドン在住のアイルランド人労働者が含まれていた可能性も考慮されねばならない。Collins, "Migrant Labour.....," 48-49, 51.

(36) Morgan, "The place of harvesters.....," 29.

(37) Morgan, *Harvesters and Harvesting.....* p. 77.

(38) *do, loc. cit.*

いては，産業構造の変化とそれに併う労働力移動の実態をイギリス・アイルランド両国に関して全体的視野の中でとらえることによって，初めて本格的な解明がなされるであろう。本稿では未だそうした分析水準に達しえていないが，そのための手がかりとして，再びモーガンの研究を検討してみたい。

彼はアイルランド人の（初発の）流入地域を規定した要因として，移民の出発地，イギリスにおける労働機会と賃金という3つの要因をあげている。[39] アイルランド人の雇用地域が時代の推移とともに北上していったことは既に述べたが，この現象は彼らが最も長期間働くことができ，最も高い賃金を獲得できる場を求めて移動したためであった。[40] 他方，アイルランド人の存在がさほど目立たない所もあった。その例としては，バッキンガムシャー（Buckinghamshire），オックスフォードシャー（Oxfordshire）等の中南部一帯があげられる。ここでは開放村落に余剰労働力が存在し，賃金が低いという特徴があった。[41] これは，先のモーガンの説明を裏から支持するものと言えよう。

しかしながら，アイルランド人の流入地域を規定した要因を考える場合，果たして上記のような経済的側面からの分析だけで十分説明し尽くされたと言えるだろうか。イングランド人とは民族・文化を異にする彼らの特徴を念頭に置く時，我々は経済外的要因にも留意する必要性があるように思われる。例えばリンカンシャー（Lincolnshire）に季節移民が流入した背景には，同州が東部最大の穀作地帯の一つであったという特徴に加えて，多数のアイルランド人が農村部に定住していたという事情も働いていたと言えよう。[42] [43] 永住移民としてイギリスに渡った同邦人の形成するコミュニティーの存在が，季節移民の行き先を決定する一つの要因となったのである。またこの州では，カトリック教会の果たした役割も大きかった。牧師は住居の世話や，農作物の作柄状況を移民に教えるなど，何かと彼らの力になったと言う。[44]

④職種と賃金

収穫期の農作業は，地元労働者と外来労働者との間で職種が分かれていた。運搬（carting）や積み重ね（stacking）は前者が担当したのに対し，刈取り（cutting），結束（tying），叢作り（shocking）等の単純作業は後者が――とりわけ最初の二つはアイルランド人が――担当した。[45] ところで，これらは，収穫作業の中でも逸早く機械が導入された部門であった。19世紀中葉以降，アイルランド人季節移民が減少した理由の一つに，機械化の影響があったことは疑いえない。[46] 一般に余剰労働

注（39） *Ibid.*, p. 76.
（40） Collins, *op. cit.*, 51.
（41） *Ibid.*, 51 ; Morgan, *op. cit.*, pp. 78, 113-114.
（42） S. Barber, "Irish Migrant Agricultural Labourers in Nineteenth Century Lincolnshire," *Saothar:* Journal of Irish Labour History Society, VIII (1982), 10.
（43） *Ibid.*, 19.
（44） *Ibid.*, 13.
（45） Morgan, "The place of harvesters....." 46, 49.
（46） *Ibid.*, 46, 64-65.

力の存在が機械化の進展を阻む要因となったことは既に指摘したが，外来労働者を排除する場合には，借地農はむしろ積極的にその採用に踏み切ったと言う。機械化は外来労働者に対して，とりわけ不利に働いたと言えよう。(47)

しかし，アイルランド人季節移民に与えた機械化の影響を過大視してはならない面もある。たとえ刈取り作業が機械化されても，ターニップの選別，ジャガイモの植付け，ホップや果実摘み，園芸作物など，手労働に専ら依存する作業は豊富に存在したからである。(48) 19世紀中葉以降，アイルランド人が流入した地域については先に検討したが，そこでは，こうした農業が展開されていたのである。また，刈取り作業自体からもアイルランド人が全く排除された訳ではなかった。重くてねじれた作物は機械での刈取りが困難で，このような場合にはアイルランド人の労働が重宝がられていた。(49) したがって，彼らは転換をとげつつあるイギリス農業労働市場の中で，その数は減少しつつも，様々な分野で存在を保ち続けたのである。

次に賃金を検討しよう。アイルランド人季節移民は，現地の労働者より低い賃金で雇われていた。1820年代の南ウェールズでは現地の賃金の50%，1851年のランカシャー（Lancashire）で60%，1867年のリンカンシャーでは60～70%の割合にそれぞれ留まっていた。しかしこうした低水準の賃金でも，アイルランド国内の賃金に比べれば遙かに高かった。(50) 例えば，1861年の時点で，アイルランドの農村で得られる賃金の最高値が週6シリングだったのに対し，リンカンシャーでは最低12～15シリング得られたと同州を対象とした研究者は述べている。(51) したがって，アイルランド的水準から見た場合，季節移民がもたらす収入の意義は極めて大きかったと言えよう。家計全体に占める季節移民の収入の割合については，次章で検討したい。

⑤農業労働隊の形成

農民にとって，天候の状態が死活問題であったことは言うまでもないが，農繁期に臨時雇用された労働者にとって，この点はことさら重要だった。とりわけ海を渡って遠方から来るアイルランド人は，天候による収穫量の増減のみならず，収穫日の変動という問題にも直面していた。もし収穫

注 (47) Collins, *op. cit.*, 57. なお，付言すれば，機械化以前の農具使用段階で，小鎌から大鎌への改良が進んでいた。前者を専ら使用したアイルランド人は，この点においても不利な状況にあった。Collins, "Harvest Technology and Labour Supply……," 457-458, do, "Migrant Labour……," 57-58. だがこうした「農具革命」(hand-tool revolution) は，コリンズが主張したほど，直線的な発展を遂げた訳ではない。同一の州においても土壌・地形その他の条件によって小鎌と大鎌の使用区域は分かれていた。例えばリンカンシャーでは，アイルランド人は低地——穀作の粘土地か沼沢地——に専ら雇用されており，大鎌の使用に適した牧草が成育している丘陵地帯には，彼らは存在しなかった。J. A. Perkins, "Harvest Technology and Labour Supply in Lincolnshire and the East Riding of Yorkshire, 1750-1850," *Tools and Tillage* III, 1 (1976), 53-54.

(48) Collins, *op. cit.*, 57.

(49) Raphael Samuel, "Village Labour," in R. Samuel ed., *op. cit.*, 18.

(50) Collins, *op. cit.*, 56.

(51) Barber, *op. cit.*, 19.

日より遅れてイギリスへ到着すれば，彼らは働き口が得られないことになるが，かといって早く到着しすぎても，収穫日まで乞食同然の状態で糊口をしのがねばならない危険に晒されていた。[52] 他方イギリス人借地農にとっても，収穫日に合わせて適切な数の労働力を調達することが経営上大きな課題であったことは言うまでもない。

こうした困難への対応策の一つとして，アイルランド人は農業労働隊制度（Agricultural Gang System）を形成した。[53] これは地元（アイルランド）の有力者が親方となって組織した雇用集団で，主として親類・友人から構成されている。[54] 労働者の組織化は，各農場を集団で移動する場合に好都合の制度であったが，利点はただそれだけに留まるものではなかった。興味深いことには，イギリス人借地農と労働隊親方との間で――しばしば代理人を介して――[55] 書簡が交わされ，その年の収穫の予想や，必要とされる労働者数がアイルランド側に前もって伝えられるようになったということである。こうした制度によって，農業労働隊と借地農との間には長年に亘る雇用関係が慣習化していく。バーバー（S. Barber）の言う労働力の「合理化」[56] がこれに他ならない。

アイルランド人季節移民の大量流入や，彼らとイギリス人労働者との接触が労働者間の対立や様々な社会不安を発生させたことはよく知られているが，バーバーはアイルランド人労働力の「合理化」以降，彼らに対するイギリス人労働者の敵対感が消滅したことを強調している。[57] イギリス人借地農の要求に応じた人数による農業労働隊制度の形成が，労働需要を超えた過剰人口の参入を制限し，現地労働者との競争を回避する働きをしたためと言えよう。農業労働市場の持つ独特の利害調整機能の一端をここに見ることができるのである。[58]

Ⅲ　アイルランドにおける季節移民の発生基盤

アイルランド農民は国内でジャガイモの植付を終えた後，夏場にイギリスへ渡った。雇用口を求めて様々な地域の農場を移動した彼らは，通常ジャガイモの収穫が行なわれる秋になると故郷へ帰

注（52）*Ibid.*, 13.

（53）イギリス国内で形成された農業労働隊制度については，福士，前掲論文に詳しい。

（54）Barber, *op. cit.*, 16.

（55）リンカンシャーの借地農に対して，農業労働隊の斡旋を行なっていたアイルランド人，マイケル・スウィーニー（Michael Sweeny）の名は，幾つかの文献に見られる。Barber, *op. cit.*, 21. T. W. Beastall, The *Agricultural Revolution in Lincolnshire* (Lincoln, 1978), p. 118.

（56）Barber, *op. cit.*, 14-18; Collins, *op. cit.*, 52; Kate Mason, "Irish Labour in the North of England," *Folk Life*, 10 (1971), 132. バーバーによれば，アイルランド人による農業労働隊制度は，在地の農業労働隊が消滅した遙か後に形成されたと言う。コリンズも，同一農場による農業労働隊の雇用は，1870年以降のことであると述べている。しかし，本文で指摘した代理人による斡旋は，1840年代末の時点で既に見られた証拠を，バーバー自身示している。Barber, *op. cit.*, 21. 因みに，イギリス人による農業労働隊制度が消滅したのは，1860年代後半以降のことであった。福士，前掲論文，35-36頁。

（57）Barber, *op. cit.*, 17-18.

（58）Collins, *op. cit.*, 56-57.

還した。[59] 季節移民を発生させたアイルランドの事情については，既に別稿において若干指摘したが，[60] ここではそれをさらに補足・展開する型で論を進めたい。

①季節移民の出身地域

第2表で示したように，季節移民の若干部分はアイルランド国内の他州（カウンティー）へ出稼ぎに行ったが，大多数はイギリスへ渡った。第4表は，1841年の時点においてイギリスへ行った季節移民の主要出身地域を示したものである。これらの諸州のうち，メイオー（Mayo），ドネゴール

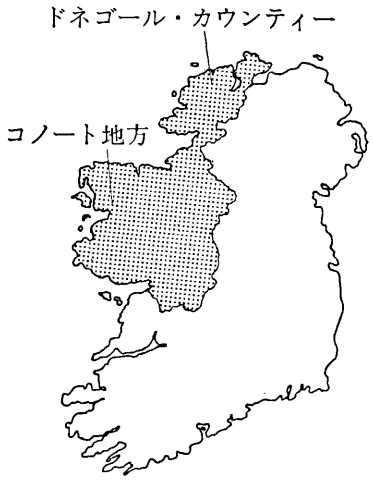
第4表　アイルランド人季節移民の出身地域

（1841年）

カウンティー	季節移民数(%)	人口比（1,000人）
Mayo	10,430 (18.1)	27.0
Dublin	5,625 (9.8)	15.2
Roscommon	5,422 (9.4)	21.3
Donegal	4,915 (8.5)	16.7
Galway	3,305 (5.7)	7.5
Sligo	3,101 (5.4)	17.2
Leitrim	2,860 (5.0)	18.5
Londonderry	2,108 (3.7)	9.5
Tyrone	2,096 (3.6)	6.7
Antrim	1,947 (3.4)	5.4
その他	15,842 (27.5)	3.1
合　計	57,651(100.0)	

（資料）*Census of Ireland, 1841*, B.P.P 1843, XXVI, より作成。

第1図　西アイルランド辺境地帯



第5表　アイルランド人季節移民の出身地域

（1881年）

カウンティー	季節移民数(%)	人口比（1,000人）
Mayo	10,742 (50.4)	43.8
Galway	2,366 (11.1)	9.7
Roscommon	1,732 (8.1)	13.1
Donegal	1,490 (7.0)	7.2
Sligo	847 (4.0)	7.6
Leitrim	723 (3.4)	8.0
Armagh	594 (2.8)	3.6
Monaghan	369 (1.7)	3.6
Cavan	302 (1.4)	2.3
Tyrone	297 (1.4)	1.5
その他	1,856 (8.7)	5.2
合　計	21,322(100.0)	

（資料）*Agricultural Statistics, Ireland, 1881*, B.P.P. 1882, IXXIV, より作成。

第6表　季節移民の発生率の高い救貧連合区

（1880年）

救貧連合区	カウンティー	人口比（1,000人）
Swineford	Mayo	93.9
Claremorris	Mayo	64.8
Castlebar	Mayo	39.8
Castlereagh	Mayo & Roscommon	36.9
Glennamaddy	Galway	30.0
Newport	Mayo	28.8
Dunfanaghy	Donegal	26.4
Tuam	Galway	23.5
Ballina	Mayo & Sligo	22.3
Tobercurry	Sligo	19.8

（資料）*Agricultural Statistics, Ireland, 1881*, B.P.P. 1882, LXXIV より作成。

注（59）少数ながらイギリスに残り，鉄道建設や港湾労働に従事した者もいた。
（60）斎藤，前掲論文。

(Donegal), ロスコモン (Roscommon), ゴールウェイ (Galway), スライゴー (Sligo), リートリム (Leitrim) は，いずれも西アイルランド辺境地帯として後に述べるような共通の特徴を有していた。[61] 第4表から確認されるように，この地帯出身の季節移民は，全アイルランドから発生した季節移民の50%を越えていたのである。次に第5表を検討しよう。この表は，19世紀末(1881年)における季節移民の出身地域を示したものであるが，この時点においても先に指摘した地帯の重要性は変わっていない。しかもここで注目されるのは，メイオー・カウンティーのみで全季節移民数の50%以上を発生させていたという事実である。

季節移民の地域社会における重要性は，分析単位をカウンティーから救貧連合区 (Poor Law Union) へと縮小させることによってより鮮明となる。第6表には，季節移民の発生率の高い救貧連合区を幾つか掲げた。ここに示された数値の多くは，第5表に示された同年のカウンティーからの季節移民発生率を大きく上回っていたのみならず，第4表に示した1841年の数値をも上回っていたのである。19世紀末においても，地域社会における季節移民の意義は，極めて大きかったと言えよう。

②西アイルランド辺境地帯の社会・経済的特徴

季節移民の主要出身地域であった西アイルランド辺境地帯の社会・経済的特徴は，どのようなものだったのだろうか。この地帯では，16世紀以来イギリス人による土地没収と植民がくり返し行なわれた東部一帯とは異なり，イギリスの影響が弱く，在来のケルト文化とカトリック信仰が強く生き続けていたことがまず指摘されねばならない。[62] 筆者が曾て検討した19世紀中葉におけるドネゴール・カウンティーのキルマクレナン (Kilmacrenan) 教区では，住民全てがカトリックで構成されている村落 (タウンランド) が，全体の半数以上を数えていた。そこにはプロテスタント＝植民者 (の子孫) とは明確に隔絶した原住者の閉鎖的社会が残存していたのである。[63] また，19世紀末において西アイルランド辺境地帯から出た季節移民のうち，アイルランド語使用者が半数を越えていたという事実も注目される。[64] 植民地化に伴って浸透した英語が日常語としての地位を確立し，アイルランド語を駆逐する中で，上記の地帯は依然として民族文化の伝統を色濃く保持していた。今日でも，メイオー，ゴールウェイ，ドネゴール等のカウンティーは，アイルランド語使用区域 (Gaeltacht) に属する部分が多く，独特の文化的特徴を有しているのである。

経済的に見ると，メイオー，ゴールウェイ，ロスコモン，スライゴー，リートリム等の諸カウンティーが属するコノート地方 (Connaught Province) は，アイルランドの4地方の中でも最貧地帯に

注 (61) 松尾太郎『近代イギリス国際経済政策史研究』(法政大学出版局，1973年)，255-259頁。
(62) 松尾太郎『アイルランドと日本』(論創社，1988年)，271頁。
(63) 斎藤英里「19世紀前半アイルランドの農村社会と麻工業」(『社会経済史学』第50巻第3号，42-43頁)。
(64) Gerard Moran, "A Passage To Britain,": Seasonal Migration and Social Change in the West of Ireland, 1870-1890, *Saothar: Journal of the Irish Labour History Society*, XIII (1988), 24.

属していた。例えば19世紀中葉において，同地方は1エーカー当り土地評価額，1人当り土地評価額，住宅事情等の指標に関して，アイルランドの中でいずれも最低の数値を示していた。[65] 同地方を訪れた人々は，一様にこの地帯の劣悪な状況を印象として述べている。[66]

産業構造の面から見ると，19世紀前半のコノート地方では，主に農業と農家の副業としての麻紡糸が婦女子によって営まれていた。当地方の農業は，東部のレンスター（Leinster）地方のような先進地帯に比べればイギリス市場への輸出額は低かったが，他の地方同様にモノカルチャー的産業発展としての様相を曲りなりにも呈していたと特徴づけられる。こうした農業生産の背後には，圧倒的多数の過小農と極少数の大農経営が併存するという特有の状況が見られた。[67] 第7表は1841年の時点における農地規模を示したものであるが，アイルランドの中でもコノート地方の農地は著しく零細であることが理解されよう。このような農地の零細性に加えて，同地方は大飢饉直前においてアイルランドの中で人口増加率が最も高い地帯であったことも指摘しなければならない。[68] この時期，東部一帯が人口増加率の減少，ないしは人口の減少傾向すら示していたのとは対蹠的現象がここでは展開していた。[69] 耕地に対する人口圧も，同地方では全国水準から見て比較的高いカウンティーが多かったのである。[70]

第7表　アイルランドにおける農民層分解（1841年）

エーカー＼地方	Leinster	Munster	Ulster	Connaught
2—10	36.9(%)	35.1(%)	43.0(%)	64.4(%)
10—30	34.2	37.8	42.2	29.1
30—60	15.5	16.9	10.7	3.7
60—	13.4	10.2	4.1	2.8

（資料）*Census of Ireland, 1841*, B.P.P. 1843, XXVI より作成。ただし，1841年センサスを批判した Bourke に従って，農地規模は2倍に修正してある。P. M. Austine Bourke, "The Agricultural Statistics of the 1841 Census of Ireland, A Critical Review", *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser, XVIII, 2 (1965), 378—379.

さて，東部一帯では人口減少と農地の統合が大飢饉を経て一層進行していったのに対し，西部では人口増大と過小農の堆積という大飢饉以前の現象が依然として続いている地帯が多かった。[71] 第8表は，19世紀中葉以降におけるコノート地方の農民層分解の動態を示したものであるが，対象とする時期を通して農地規模がほとんど変動していないことに気づくであろう。そこでは，曲りなりに

注 (65) Eric Lucien Almquist, *Mayo and Beyond: Land, Domestic Industry, and Rural Transformation in the Irish West* (unpub. ph. D. thesis, Boston Univ. 1977), pp. 348, 353-354.

(66) T. W. Freeman, *Fre-Famine Ireland* (Manchester, 1957), p. 242.

(67) 松尾太郎『近代イギリス国際経済政策史研究』，255-257頁。

(68) Cormac Ó Gráda "Demographic adjustment and seasonal migration in nineteenth-century Ireland," in L. M. Cullen & F. Furet eds., *Ireland and France 17th-20th centuries* (Paris, 1980), 186, Fig. 1.

(69) *Ibid.*, 181-185.

(70) 1841年において全国32カウンティー中，メイオー2位，リートリム9位，スライゴー13位であった。Almquist, *op. cit.*, p. 351.

(71) S. H. Cousens, "Emigration and Demographic Change in Ireland, 1851-1861," *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser., XIV, 2 (1961); do, "The Regional Variations in Population Changes in Ireland, 1861-1881," *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser ; XVII, 2 (1964-65).

第8表　コノート地方における農民層分解（%）

エーカー＼年	1851		1861		1871		1881		1891	
1 以下	5.1	20.1	6.0	20.5	6.2	19.0	5.6	17.6	4.9	15.5
1— 5	15.0		14.5		12.8		12.0		10.6	
5— 15	40.1	63.5	37.7	62.1	38.9	64.5	39.3	65.3	38.2	65.5
15— 30	23.4		24.4		25.6		26.0		27.3	
30— 50	16.4		8.3	13.2	8.3	12.8	8.3	13.0	9.4	14.6
50—100			4.9		4.5		4.7		5.2	
100—			4.2		3.7		4.1		4.4	

（資料）*Census of Ireland, 1851,* B.P.P. 1852—53, XCIII; *Agricultural Statistics, Ireland, 1861,* B.P.P. 1863, LXIX, その他，各年度の農業統計より作成。

も農業のみで再生産可能な30—100エーカー層と，資本家的借地農と規定される100エーカー以上層は合計して20%に満たず，5—30エーカーの兼業農家と5エーカー以下の土地持ち労働者層とが併わせて80%以上を占めるという構造が一貫して見られたのである。(72)

以上のような農民の階層区分を念頭に置いた上で，季節移民の発生との関連を示したのが第9表である。まず季節移民全体の中では非土地保有者層の割合が過半を占めていることに気づくであろう。しかし土地保有者層について見ると，5—15エーカー層を中心として，兼業農家から季節移民の発生が多いことも確認される。このことと，先に指摘した非土地保有者層からの季節移民の発生の多さとは，どう矛盾なく説明できるのだろうか。この点，非土地保有者層の実体は完全な農業プロレタリアートではなく，兼業農家を中心とする土地保有者層の子弟と想定すれば，整合的な理解が得られるのではあるまいか。(73) アイルランド西部における家族形態について，本稿で包括的な分析を行なうことはできないが，一つの事例としてここではドゴネール・カウンティーのクランフォード村(74) (Cranford townland) を対象とした松尾氏の研究を参考としたい。(75) この村落では20世紀初頭の段階において，親子関係ないし婚姻関係を含まない破滅的家族形態の出現がようやく始まっていたとは言うものの，二世代以上から構成される家族が依然として8割以上を占めていた。世代を超えた家族的結合の強さには，著しいものがあったと言え

第9表　コノート地方における農地規模別季節移民数
（1880年）

エーカー	季節移民数	%	
非土地保有者	9,636	61.1	
1以下	33	0.2	4.1
1— 5	621	3.9	
5—15	3,840	24.3	33.7
15—30	1,476	9.4	
30以上	168	1.1	
計	15,774	100.0	

（資料）*Agricultural Statistics, Ireland, 1880,* B.P.P. 1881, XCIII より作成。

注（72）以上の農地の階層区分とその規定については，松尾太郎『アイルランドと日本』，77-80頁に従った。
（73）Almquist, *op. cit.*, p. 253; Ó Gráda, *op. cit.*, 189.
（74）この村落は，前段で紹介したキルマクレナン教区の閉鎖的カトリック地帯に属していた。
（75）松尾，前掲書，234-241頁。

第10表　19世紀末における農民家計

事例 (1) Cash receipts of a six——person family

	£.	s.	d.
Sale of pigs	6	0	0
cattle	2	0	0
butter	3	10	0
oats	3	0	0
straw or hay	1	0	0
potatoes	2	0	0
eggs	3	0	0
chicken		5	0
Man in England	8	0	0
Total	33	15	0

事例 (2) Income and Expenditure of a Family in Poor Circumstances

Income	£.	s.	d.	Expenditure	£.	s.	d.
Sale of eggs	4	0	0	Rent	1	10	0
Sale of pigs	1	10	0	County Cess		2	6
Sale of bullock	1	10	0	Church		5	0
Migratory labour	10	0	0	Meal and flour	4	4	0
				Groceries	3	15	0
				Tobacco	2	12	0
				Clothes	3	10	0
				Household	1	10	0
Total	17	0	0		17	8	6

（出典）事例(1) Cormac Ó Grada, "Seasonal Migration and Post-Famine Adjustment in the West of Irerand," *Studia Hibernica* XIII (1973), 62, Table III b.

事例(2) J. H. Johnson, "Harvest Migration from Nineteenth-Century Ireland," *Transaction of the Institute of British Geographers*, 41 (1967), 98 Table I.

なお，両事例はともに，アイルランド西部の貧民稠密地方局（Congested District Board）の報告集からとられたものである。

よう。

最後に，農民家計に占める季節移民の意義について，その一端を窺い知るため第10表を掲げておこう。この表の事例から，季節移民によって得られる賃金は収入項目の筆頭を占めており，その比重も極めて大きいものであったことがわかる[76]。したがって，このような追加的収入なしには，農業のみで自立不可能な階層にとって最貧地帯での生存は困難だったと言えよう。

③プロト工業化論の再検討

既に述べたように，19世紀を通して季節移民を最も多く発生させたカウンティーは，コノート地方のメイオーであった。季節移民が本格化する大飢饉直前のメイオーでは，地味瘠貧，高人口庄，早婚，零細農地，農村婦女子による麻紡糸業の展開等々の諸特徴が見られた。こうした特徴に着目したアームクイスト（E. L. Almquist）は，1841年センサスのデーターを中心とした相関分析を行ない，この時期のメイオーをメンデルス（F. Mendels）によって提唱されたプロト工業化理論の典型的事例として把握したのである[77]。また彼は，男子結婚率が高く，農地が零細な地域ほど季節移民の発生が多いという仮説を提示し，その説明の有効性をアイルランドにおいて検証している。この論文は，プロト工業化モデルの妥当性を示す事例研究として，我が国においても注目を浴びたのであった[78]。

本稿では，プロト工業化論自体の一般的評価は保留するとして，メイオーが果たしてプロト工業

注 (76) 本文で紹介した事例の他に，Anne O'Dowd, "Sweeten that to your Liking," — Irish Seasonal Workers in Fact and Fiction, *Folk Life* 20 (1981-2), 76. をも参照。

(77) Eric L. Almquist, "Pre-Famine Ireland and the Theory of European Proto-industrialization: Evidence from the 1841 Census," *Journal of Economic History*, XXXIX, 3 (1979).

(78) 斎藤修『プロト工業化の時代』（日本評論社，1985年）146-148頁。

化地域としての性格を帯びており，季節移民もかかる現象を前提として発生したと言えるのか，という点について検討したい。まず，センサスを中心とする19世紀中葉の諸資料を使用したアームクイストの分析方法は，様々な経済要因の横断的関係をつかまえたにすぎず，例えば人口増大や土地の細分化の進行と麻紡糸業の発展とに相関関係があったか否かは明らかでない点を指摘したい。しかも，西アイルランド辺境地帯における麻紡糸業は，19世紀中葉の時点で既に衰退の途をたどっていたという事実を考慮すると，上記の地帯でプロト工業化的現象が展開していたという主張は極めて受け入れ難くなると言わざるを得ない。[79] したがって，この時点における季節移民の本格化は，プロト工業化とともに進行したのではなく，むしろ衰退する紡糸業の代替収入源として理解されるべきものであろう。

別稿で指摘したように，季節移民の発生において伝統的社会構造の持つ意義は極めて重要だったが，アームクイストのプロト工業化論では，この点の検討が充分行なわれたとは言い難い。しかし，1977年ボストン大学に提出し，先の論文のプロト・タイプをなした彼の博士論文では，農村の共同体的慣行や共同地・共同借地について詳細な叙述がなされていたことを見のがしてはならないであろう。[80] 彼はメイオーを対象としたこの論文において，同カウンティーにおける共同地・共同借地の比率（1845年の時点で総面積の58%）と，イギリスへの季節移民数がともにアイルランドで最も高いことに着目し，共同体的諸関係の残存が農民に広く土地の利用＝再生産の条件を保証したため，メイオー（その中でも後進地帯）のような伝統的要素の強い地帯では永久的に故郷を去り移民する必然性が少なく，季節移民による収入に依拠する型で曲りなりにも農業経営を維持することができたと論じている。[81]「季節移民は，新しい状況下（産業革命以降）において完全なるプロレタリア化を回避する手段であった」というオグラダの指摘[82]もこれと同様の関連を述べたものと思われる。

最後に季節移民の送出要因として，ゴンビーンマン（gombeenman）による移民への資金貸与という事態が見られたことを指摘したい。[83] ゴンビーンマンとは，農村において高利貸支配を行なったカトリック商店主のことで，彼らの存在は大飢饉以降の西アイルランドで特に顕著に見られた。彼らは農民を慢性的債務状態に緊縛することによって，経済的側面のみならず全人格的領域に渡る支配を及ぼしたのであった。[84] 季節移民と伝統社会との抜きさし難い関連を示す現象と言えよう。

注（79）斎藤英里，前掲論文，特に63-64頁を参照されたい。

（80）Eric Lucien, Almquist, *Mayo and Beyond: Land, Domestic Industry, and Rural Transformation in the Irish West*, chap 3. なお，アームクイストの専攻が文化人類学であったこともつけ加えておきたい。

（81）*Ibid.*, p. 261. ロンドンデリー（Londonderry）・カウンティーの後進地帯についても，同様の指摘がなされている。J. H. Johnson "The Population of Londonderry during the Great Irish Famine," *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser., X, 2 (1957), 283. 斎藤英里「19世紀のアイルランドにおける貧困と移民」（『三田学会雑誌』78巻3号，89-90頁）をも参照されたい。

（82）Ó Gráda, *op. cit.*, 189.

（83）Moran, *op. cit.*, 23-24.

（84）松尾，前掲書，110-111頁。

Ⅳ むすび

本稿でしばしば依拠したコリンズは，従来社会的あるいは人口学的関心から注目されることが多かった季節移民を経済的側面から分析し，それが送出側と受容側双方にとって，ともにプラスの効果があったことを強調している。ここでは本稿のむすびとして，彼の論点の幾つかを検討することにより，今後の研究の方向を探ることとしたい。

①過剰人口，非生産的農業，副業の乏しさ等によって特徴づけられる高地ケルト地帯では，労働力の限界生産性はゼロかそれに近いほど低かった。こうした状況下では，大量の労働はジャガイモの植付けや掘り起こし，干し草作り等の限られた作業にのみ必要であった。したがって，季節移民による男子労働力の一時的流出は経済的損失となるよりも，むしろ地代や負債の支払に不可欠な収入源として重要だったと言える。要するに，コリンズによれば，季節移民は送り出す側にとって，ほとんどあるいは全く投資コストをかけずに生産及び収入を極大化する方策だったのである。(85)

しかし，季節移民がアイルランドの農業発展や農村の生活水準の上昇に寄与したとする見解には，強い批判も寄せられている。(86) 本稿で確認した19世紀後半における西アイルランド辺境地帯の農民層分解の停滞性や，伝統社会の残存といった事態も，上記の批判と関連して想起されねばならない。総じて，アイルランド社会における季節移民の意義は，単に農業生産という量的側面から追求するだけでなく，農業・土地問題全体の構造の中で検討する必要があろう。(87)

②アイルランド人季節移民は，穀物収穫のような労働の限界生産性が比較的高い部門に参入することにより，イギリス低地地帯における農業生産の拡大に寄与した。こうした地帯では，在地の労働供給は非弾力的性格を持っており，季節移民の地位を有利にしたのである。また，労働需要の変動が最も激しい部門に季節移民が集中する傾向は，農業のみならず建築業などの非農業部門にも見られた特徴だったと言う。(88) しかし本稿ではテーマの制約上，非農業部門におけるアイルランド人の役割を論ずることはできなかった。永住移民も含めた広い視野の下で，イギリス資本主義の発展にとってアイルランド人が果たした役割は何であったのかを再考することは，他日の課題としたい。

〔追記〕 本稿は，昭和63年度慶應義塾学事振興資金による研究成果の一部である。記して感謝したい。また，本多三郎氏より幾つかの貴重な文献を提供して頂いた。心から御礼を申し上げたい。

（慶應義塾志木高等学校教諭）

注 (85) Collins, "Migrant Labour……," 53. パーキンスは，大飢饉以降季節移民は家計補充としての役割から，農業経営向上の資金源に変化したとさえ述べている。John A. Perkins, "The Sickle, the Scythe, and the Physical Characteristics of Migratory Harvest Workers," *Ethnologia Europaea* 10 (1), (1977-78), 96.

(86) Ó Gráda, "Seasonal Migration and Post-Famine Adjustment……," 61; O'Dowd, *op. cit.*, 82, Moran, *op. cit.*, 26.

(87) 例えば，世紀末農業不況の深刻化と土地同盟の闘争の激化，土地改革の進行が錯綜する中では，季節移民の激減と永住移民が本格化するという事態が見られた。松尾，前掲書，162-163頁。

(88) Collins, *op. cit.*, 54.